

新刊紹介

科學方法論 (續哲學叢書 第十篇) 戶坂潤著

著者戸坂氏は大正十三年京大哲學科出身、大學院に於て科學方法論を考究せる篤學有爲の士、本書は氏多年の研究の成果を公にせられたるもの、學界に裨益する事大なるものがある。先づ本書大體の論構は次の如し。序、總論—方法概念の分析(その一、その二)、特論、一、學問の分類、二、科學論、三、科學的世界、科學の學問性。結論。

本書の特色は、總論に當る方法概念の分析の内に存する。特論の部は著者自らが序文中に於て述べてゐる如く、總論に於ける論究の結果到達せる方法概念を以て、主としてリツケルト教授の科學論を見直した試である。而して全篇を通じて流れてゐる著者の主張は「方法概念の運動」である。

先づ一般に、學問論に於ては如何なる問題が取扱はるか。氏によれば次の五つであり、前述の各項はその各々の解明を企てたものである。

(一) 學問に於ける方法、對象の構造の分析〔方法概念

の分析、その一〕

(二) 學問性の分析〔方法概念の分析、その二〕

(三) 知識乃至認識の分析、(知識學、認識論)、〔科學論〕

(四) 歴史、社會的存在としての客觀的現實存在の學問の分類〔學問分類〕

(五) 科學の特質〔科學的世界、科學の學問性〕

(一)に於て氏の論ずる所に依れば、學問に於ける方法と對象との關係に於て、(1)對象が方法を決定するを考ふる素朴的、獨斷的立場(2)方法が對象を決定するを考ふる觀念論的立場(3)第三者が兩方を決定するを考ふる逃避的立場があるが、何れも不完全であつて(4)方法と對象との相互決定の立場が吾人の探るべき道なる事を主張してゐる。氏はこの兩者の相互決定の關係を「運動」といふてゐる。即ち研究と共にこの兩者は變化する。即ち方法によりて正統に理解せらるゝ迄は明るみから隠されてゐた自然の事物の諸規定は、次第に明るみの前に持ち出され、その個々の色彩を興へらるゝ事に依り對象は次第に變化する。又一方、方法は初め事物を單に觀察するが、やがて之を記述し、遂に之を説明する。之方法の變化である。方法と對象とは反對概念ではあるが、この反對の意味は

『對立でなく、形式的反對でもなく、矛盾でもなく、相對でもなく、相關でもない。それは運動の可能性に基く一つの關係である』(十七頁)。即兩者間の運動によりて對象が方法となり、方法が對象となる事が望ましい。而してこの運動の仕方は否定である。その否定の意味は對象が方法によりて構成されたものとして見出され、今迄對象を考へられたものをば却つて方法として發見する。自然の事物として與へられたる對象は、自然科学の内容として性格づけられる。之こそ對象が方法によりて否定せられたのである。又逆に方法は對象の内に見出される。單に獨立なる方法はない。對象は自己に個有な方法を命ずる事によりて各々その對象らしさを帶び、かくて對象は方法を否定する事となる。方法と對象との一般關係を氏は以上の如くに論じてゐるが次の第二部に於て氏はこの問題を更に精密に論究してゐる。即、對象概念、方法概念が次第に運動して具體的學問の成立に進む事を示し、先づ對象は、學問構成前の對象から構成後の對象へ運動し、研究方法は、對象把握の方法から、學問の對象の構成原理となる。始めは單なる研究方法であつたものが遂に學問の方法となり、最後には、研究の成果を意味するところとなる。こゝに到れば方法概念は對象概念を

克服する。氏はこの運動を跡づけて次の三階段とする。
 (一) 研究方法(形式論理學の方法論。特殊科學の方法論)。(二) 學問の構成(リツケルトの科學論)。(三) 對象規定(相對性理論の示す世界形象の考察)。
 この方法概念の運動に相對應する對象概念の運動は次の三である。

(一) 實踐的に行はるゝ、研究の對象なりし對象(構成以前の對象の概念、即常識概念)。(二) 學問内容(抽象的概念、現象)。(三) 方法規定(數量、空間量、坐標)。かくして學問は方法によつてその性格を理解せらるゝと共に、又同じく對象によりてその性格が理解せられる。前者は科學論の名の下に、後者は學問分類の名の下に、それらの必然性をもつ。然るに事實上、學問を性格づけるに、方法による方がより適はしいと思はれるのは、方法が吾々(自我)に屬するものであり、自我が實踐的なによるものといはれる。

(二)に於て論ぜられてゐる所は、學問に於て方法が求められねばならぬ理由の探究である。そこで、こゝでは學問性概念の分析を試みられてゐる。氏の分析によれば學問性は教導性、公共性をその特徴とする。後者は、原則上學問が普遍妥當性を持たねばならぬ事を意味し、前

者は更に傳承性ミ誘導性ミなる。然るに更に之を具體的に考へる時は、如何にせば誘導的ミなるかといふ問題ミ如何にせば傳承的ミなるかといふ問題ミが解決せられねばならぬ。誘導的たらしめるものは手續方法の問題であり、傳承的たらしめるものは成果、體系の問題である。

こゝで學問性の特質ミして、方法ミ體系の二要素が見出されたが、この兩者の内方法が、成果ミしての體系よりも、實踐的に優越せる位置を占める。何者、方法は單に誘導以上のものをその内に含み得る。即ちある成果、體系の單なる誘導たる手續のみに止まらず、理論の着眼出發の仕方、問題の提出法、問題の取扱ひ、考へ方等に於て、既に問題の解決の或る種の豫定がなされたものといふことが出来る。かくして組織ミしての體系への運動を試みるのである。かくして第四部に於て學問性を更に眞理性の獲得にありしし、眞理性ミは(一)問題の解決ミ(二)批判ミであり、批判は根柢の理解、反省、社會的規定に對する自己批判であり、何れも方法概念に屬する事を論じ、以て學問性の中樞の規定が方法にある事を述べてゐる。

以上の(一)(二)に於て氏の云はんミする主張は盡されてゐて、(三)以下は特論であるが故に簡略に紹介す

る。(三)は學問分類であつて、之には分類原理の問題ミ現實の學問の分類の問題ミがある。先づ學問ミ他の人類創作ミを分ける場合には、學問性がその分類原理ミなる更に學問内部に於ける分類がなされ、自然科學又は特殊科學ミ、批判科學又は哲學ミの區別が、實證ミ價值ミによりてなされる。所で、こゝで取扱ふ問題ミして、氏は學問の内哲學を除き、科學の分類にその範圍を定め、次の五つの分類を説明してゐる。

(1)精神能力による分類(ベークン)、(2)對象による分類(ザント)、(3)概念構成による分類(リツケルト)、(4)科學的世界による分類、(5)學問性による分類。

然るにかく論究が進めらるゝに従つて、學問分類の問題は次第に學問形態の問題に移動し、次の科學論の問題を引起して来る。

(四)に於ては先づ分類そのものの破綻から論じてゐる。それは分類が論理的に正しきが爲には、分類原理によりて抽象的に分けられねばならず、又學問分類ミいふ概念そのものの含む性質ミして、現實に存する諸の科學が分けられねばならぬ。分類原理を嚴密に固守する時は現存せざる學問を想定せざるを得なくなり、學問分類の要求に矛盾する。かくて對象による分類は不完全なるも

のミなり、方法による分類が問題ミなる。換言せば分類如何でなく方法如何である。かくて認識論が科學論の根柢ミなる。氏は先づカントの認識論を説き、ついでリツケルトの夫に進み、歴史科學ミ自然科學ミを價值に基いて分類するリツケルトの科學論を略述し、次いで第二部に於て、之に對するコエーレルの三個條の批評を紹介し、並に他の一個條を附加する事によりてその論を進めてゐる。

第一にリツケルトの歴史科學を立つる根據は、個別的因果の考であるが、之は二様に解する事が出来る。(1)同一の原因が時の異なるに従ひ、異なる結果を引起すミ考へる場合。然し乍ら現實に把握出來て、從つて科學に於て意味を持つ事の出来る因果關係は、同一の原因が同一の結果を引起す所の法則的因果のみである。(2)同一の原因が全く二度ミ起り得ないミ考ふる場合。然しかゝる個別的因果は、法則的因果ミ區別される必要はない。要するにこの第一の批難は個別的因果に對する批難でなくリツケルトの根本的立場に對する批難である。

第二の批難は自然科學的法則ミ個物ミの關係について、その科學論が自然科學的方法の現實的内容へ充分に入つてゐない點。

第三の批難は、價值關係づけのみによつては、歴史科學的概念構成の性格は明にされぬ點。即、歴史科學にミつて重大なる關心は、歴史科學が、かゝる價值關係的記述をなすこいふ主張よりも、如何なる手續によりてかゝる記述がなされる、かである。即、歴史的全體ミ部分ミを聯關せしめる現實的な方法が第一義的な問題ミなる。

第四に、歴史を、社會概念ミの關係に於て理解せねばならぬ。然るにリツケルトに依れば、歴史的法則こいふ概念は矛盾である。然るに、自然必然的な自然法則でなく歴史的社会的存在に於てのみ見出され得る様な歴史運動の原動力ミしての歴史的法則が存する。

かゝる四種の批難が起るのは、リツケルトの方法論が充分に現實的、實踐的ならざることによる。科學論の形態は科學的世界の方法論的分析ミして現はれる。

(五)に於ては科學的世界の特質を論じてゐる。先づ初めに自然科學を論じて、これの精密性は空間性によつて與へられ、之を表現するものは坐標である故に、自然科學の精密性を示すものは測定の坐標ミなる。而してこの測定の坐標は一の物理的方法なるミ共に物理的對象である。かくてこの坐標によりて現はされたる空間は、方法ミ對象ミの一致を示せるものである。かくて數學的方法

を用ふる計算し得る量を取扱ふ正確なる科學は物理學であるといふ事が出来る。尙この外に、理論の論理學的必然性に基く科學の場合もあり、或は又ある學問の場合に於ては、最後の一步に於て精密嚴正とは異なる何かの要素に基かなくては、その學問が、それに個有な學問らしい學問性を却つて發揮出来ない場合もある。

論證的學問性の限界を、氏は透察性三名付けてゐるが、かくすれば學問は論證的三透察性の二者に分たれる。而して氏は更にこの兩者に夫々對應して眞理を分つて、(1)事實決定の眞理(水素原子の構造等)三、(2)事實解釋の眞理(藝術作品の鑑賞等)三してゐる。この透察的學問性とは、論證的學問性とは異り、性格的乃至個性的である。然らば透察性は超個人的普遍性をもたないか。個人は歴史社會に於ける存在である。個人は時代的錯誤三地方的錯誤三からさへ警戒されねばならぬ。こゝに透察は或る普遍性を要求される。この錯誤を除く方法三として透察は二個の條件を具備せねばならぬ。(一)多面性、包括的なること。(二)透察の正面的なること。かくして氏によれば論證的學問性の代表的なるもの三として、自然科学特に物理學があり、透察的學問性の代表的なるもの三として歴史科學が生ずる。而して他の科學はこの兩者の中

間に位するもの三氏は主張してゐる。

上述せる所は、本書に於て取扱へる問題三、その解決三を、演繹的に叙述せるものである。氏はその意味する所を誤解ならしむる爲であらうが、その文章に於て可なり廻りくまなく言ひ廻してゐられる點も見受けられたが、從來の哲學書に於てよく見られた生硬な字句を成る可く使はないで、しつこり三した日常語で適切に表現せられた點は、大いに氏の努力の跡が見られた。且その行文に於て、知つてゐる知識を教へる爲に羅列する三といふ氣配が少しもなく、絶えず問題を起してはそれを根本的に思索し、更に次の問題を起す三といふこの論の進め方は、所謂『哲學する』、『思索する』三といふこの練習三しても極めて有意義な試みであると思はれる。この意味に於て苟も哲學に志さるゝ諸氏の是非閱讀すべき良書たるを信ずる。(岩波書店刊行)〔飯田順雄紹介〕

天台の密教 清水谷恭順著

我が國に密教の傳へられたのは、傳教大師以前からであるが、當時は、まだその傳來が正規的でなく、所謂雜密三稱せられる状態であつた。大師は唐に入つて、天台宗を傳へるにあたり、天台宗のものに密教や禪、念佛をも併せ傳へた。故に大師を日本最初の密教の阿闍梨三